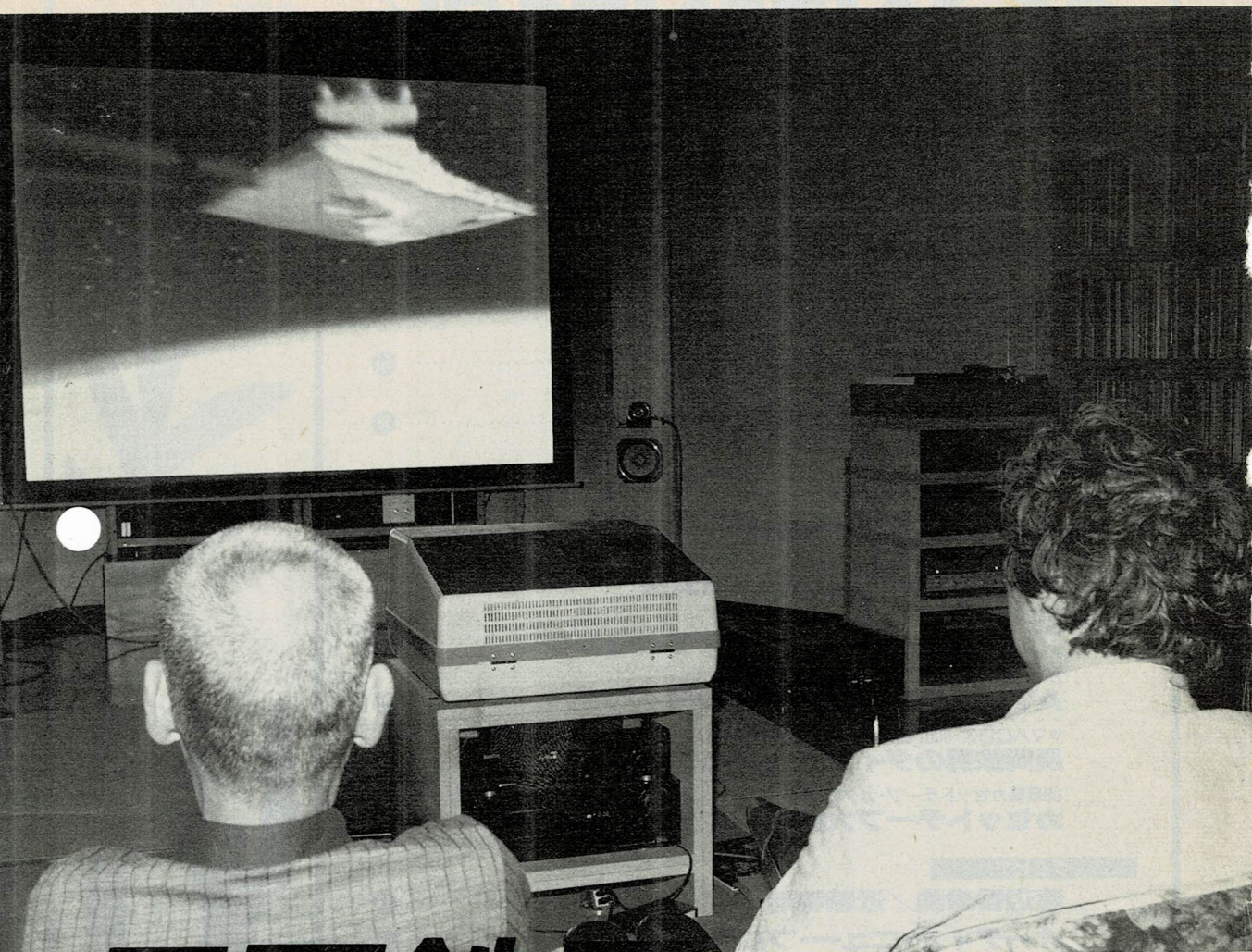




長岡鉄男 立花 隆

AU Talk

音楽はやはりピュア・オーディオがいい
でも、Vの情報は一瞬でも圧倒的だ！

構成・正木豊 撮影・河野隆行

2年前の冬、長岡鉄男ピュア・オーディオ・ルームを訪ね、長岡オーディオの神髄に触れ、自作スピーカー“スワン”を激賞した立花氏。氏が大変なオーディオ・マニアであることは本誌でも何度も紹介したが、現在はBSをセットし、ハイビジョンにも強い関心を持つ。そして今、再度の長岡詣で。目指すは話題のAVルーム「方舟」である。

いつもながら超多忙を極める長岡先生、約束の時間よりも早めに到着してしまっただ立花さんと私たちは、原稿の書き上がり間際という先生に案内されて、しばらく「方舟」で待つことになった。実際に訪れた人が必ず漏らす「ホー」という感嘆の声は、立花さんも例外ではない。ただ、正面に120インチのスクリーンと、その脇にそびえる「ネッシー」、両側の壁には、アンプなどのオーディオ機器や工具類、それにぎっしりソフトが並ぶこの部屋が、仰々しさや威圧感がなく不思議に落ち着くのは、広さや天井の高さのせいばかりでなく「オモチャ箱」のようなある種の雑然さと楽しさに満ちている感じがするからかもしれない。部屋にあるいろいろな機器を眺めながらしばし待つうちに、原稿を書き終えた先生が登場。ひと通り部屋の構造や機器類の説明を受けた後、いよいよ120インチスクリーンでのレーザーディスク鑑賞会。この日を心待ちにしていたという立花さんは、自らもソフトを持参してきている。「カルメン」「スターウォーズ」「ガウディ」「ウォール」などSF映画や音楽ソフトのハイライトシーンが、次々と画面に映しだされていく。今まで見慣れていたソフトが、全然別のものに思えるほど、新鮮な驚きの連続だ。

原点は何十年も前に読んだSF小説

立花 これでも、まだシステムが現在進行形だそうですが、この先どこをどうしようと思っているんですか。

長岡 スピーカーですね、まず。ユニットをもう少し高級なやつにしたい。アンプもそろそろ寿命ですから、変えなきゃいけないし。それと、スクリーンを150インチにしようかなと思っているんです。ただ、そうするとスピーカーの間隔が開きすぎちゃうんです。

立花 この大きさでもソフトの質の差がすごく出ちゃうから、150にしたらもっと。

長岡 ええ、見られないソフトが増えてくるんじゃないですかね。

立花 そもそも、いつごろから、こんなものを作ろうと考えてらっしゃったんですか。

長岡 具体的には最近ですね。2、3年前かな。ただ、作りたいな、と思ったの

は、もう何十年も前のことです。いつかこういうものを作りたいという気持ちは、あったんですよ。

立花 そのころに想像してたのは、今のようイメージですか。

長岡 いや、違いますね。映画館のようなものです。テレビでこういうことができるなんて考えられなかったですから。ただSFではありましたからね。ブラッドベリの「華氏451度」、あれに出てくるんですよ。テレビ室のようなものが出てくる。壁面の全部がテレビという、画のサラウンドだね。そこで1日中、何か飲んだり食ったりしながら見ているという。それと昔見たSF映画でも、大きなスクリーンが出てきますね。

そういうのをずっと見ていて、ああ、ああいうでっかい画面が欲しいなと。それからもう何十年も経って、やっと夢が実現というわけです。

立花 映画はよくいらっしゃるんですか。

長岡 久しく行ってないですね。暇がないこともあるし、それと、評判を聞いて見にいくとガッカリすることが多いですね。

立花 それはありますね。評判を聞いた時点で、期待が膨らんでいって、それとの落差が大きいともうだめですね。だから、だれも見ることがないソフトを見つけてきて、すごく面白いと思っている方がいい。

長岡 オーディオもそうですね。人の知らないパーツ、それから人の知らないソフト。当たり前のソフトは聴く気がしないですよ。

映画に行かないというのは、結局、一番いい席が取れないからですよ。最良の席だったら、映画館でもきつといいんだと思います。そうでないと、何か画面は悪くなっているし、音はちゃんとステレオになっていないし。

立花 それで、変な観客が前にいて、何か食べてたりすると、もう最悪。

長岡 それと、融通がきかないでしょう。あ、見落としちゃったからもう一度というわけにはいかないし。だから、映画を家で見たいという気持ちが「方舟」製作の理由の一つ。もう一つは老後の楽しみというのもあったんですけど……。

立花 若い読者なんかはうらやましがるでしょうね。

長岡 それはね、仕方ないですよ。僕らが若いころは、何もできなかったもの。何もなかった。オーディオだっただけですから。

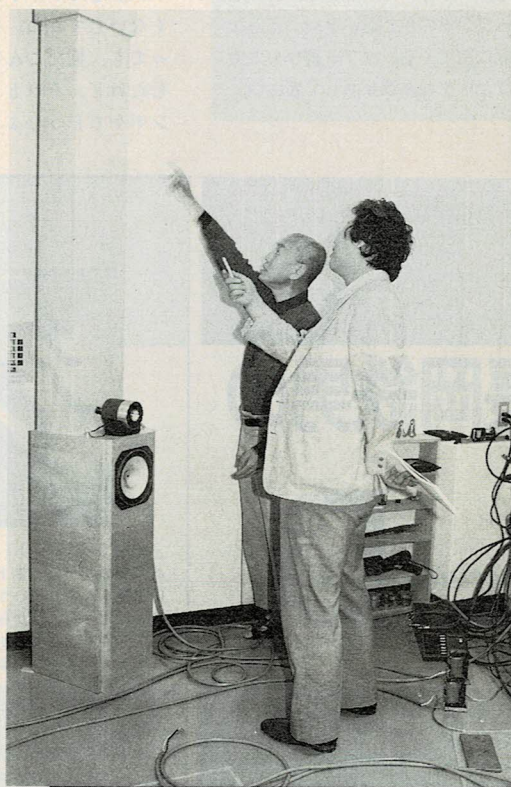
立花 そうですね。

長岡 年を取れば、大抵のことはできますよ、まともに暮らしていればね。それを若いうちにやろうっていうのは、ぜいたくだ。

立花 あれもしたい、これもしたい。もちろんオーディオもビジュアルもやりたいと。

長岡 そうそう。

立花 僕の若いころだっただけ何もなかったですよ。ところが、今の若い人は一応の金を持っているし……。先生が、どこ



プロジェクター 120インチスクリーンとともに「方舟」を支えるのが自作AVスピーカー「ネッシー」



防音対策は万全で窓は四重

かでお書きになっていたように、たちまち4、500万の車を買うわけでしょう。
長岡 親が出すしね。だから、AVシステムなんか買うのはわけないですよ。これは非常に幸せですよ。

ちょっと「いまどきの若者」批判も出たりして耳が痛いけど正直なところ、やはりうらやましいのは事実。さぞや、1日中「方舟」にこもって、AVざんまいの生活を送っているのかと思いきや、意外な悩みが話に出てくる。ソフト選びも先生独自のユニークな基準があって面白い。

**せっかく「いい女」を
 囲っているのに……**

立花 あちらの（母家の）オーディオルームでも、AVはやられていたんですよ。そのころと見るソフトは変わってきました。

長岡 そうですね。例えば「スターウォーズ」なんか、小さい画面で見ても面白くないですよ。小さい宇宙船が飛び回っても、何だこんなもの、という感じがしたけど。それと「アマデウス」は、ピンボケでどうしようもなかったけど、こ

っちで見ると違うなんていう、思わぬ発見もありました。逆に「未知との遭遇」は、音はすごい、これはいいと思ってたんです。ところが、こちらでは、画面のキメが粗いんですよ。音も荒っぽいしね。ほんとの低音じゃなくて、妙な雰囲気を持っていたりして。

立花 「カルメン」も低音がないですね。純粹に映画畑で育った人というのは、あんまり音に気を使わないですね。昔、映画の音のクオリティってすごく低かったから、そこでずっと育てきちゃうと、そうなるっちゃうのかもしれない。

実は、今日ここに来るというのでフェリーニの新しい作品の音がいいかなと思って見直したら、モノラルだしいいともなかった。あれだけけらん豪華な画を作る人だから、音に凝りだしたら、もっとすごいんだろうけど。ちょっと古い世代の巨匠には、ほんとにひどい音のものを作ってる人がいますね。

長岡 僕のもっているソフトというのは、条件があるわけですよ。値段の割に時間が長い、それからステレオであること、この二つの条件。だから、SFXだとかホラーだとかゲテモノばっかり集まっちゃう。

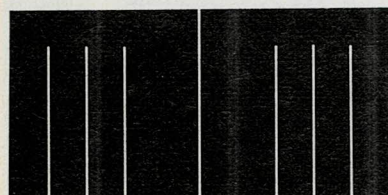
立花 じゃ、大体、見るのは夜の方が多いんですか。

長岡 いや、一度ゆっくり映画を1本見てみたいなあ、という気持ちは、非常に



長岡鉄男の

LD
Special Selection

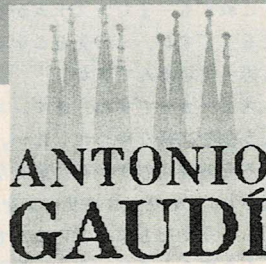


トップガン
 (LDC SF078-1335)



劇場でも大ヒット、オーディオ・フェアをはじめ各種のAVデモンストレーションでも大人気。いい加減うんざりという人もいるだろう。筆者もその一人だった。だから買ったのは最近である。それでもやっぱりすごかった。この映画はちゃんとしたストーリーがあるが、それはどうでもいい。ジェット機と空の美しさ、空中撮影の見事さ（恐らく史上最高）、それをバックアップする音響効果の相乗効果、これがすべてである。LDとしてはSN比がもう一つだが、情報量、色調、コントラスト、スピード感、奥行き感といったものはAクラス、音も音楽もAクラス、サラウンド効果も見事で、何度見ても手に汗を握り、見終わると肩が凝ってしまう。

アントニオ・ガウディ
 (CBSソニー 96LF5)



監修ホアン・バセゴダ・ノネル、製作・監督・編集勅使河原宏、音楽武満徹。なぜかジャンル分けでは「邦画」に入っている。しかしどう見ても劇映画ではない。詩的に構成されたドキュメンタリーともいえるのか。ドキュメンタリーものはずいぶん買ったが、ほとんどは失敗だった。音が悪い、さらに悪いのが、きかない声で、途方もない大音声でまくしたてるナレーション。ガウディにはナレーションがない。音楽も優秀だ。へたな音楽物LDを上回る。クリスタル（グラスハーモニカの巨大発展型）のような音も聴けるのだが、実体は何なのか。映像はかなり悪い部分と、極めて優秀な部分とが入り乱れている。建築物やモザイク画を扱った部分はすごい。

③

強いんですけどね、なかなか見られない。いやになっちゃうね。

立花 年中、飛ばし見ですか。そりやつまらないでしょうね。

長岡 なにしろ、まともにまだ1本を見たことがない。

立花 えーっ！ それ、ほんとですか。

長岡 なんか欲求不満で、だんだんおかしくなる。よくないですよ。

立花 なんか、せっかくな女と同棲するようになったのに、まだ最後まで行っ

てないって感じですね(笑)。

長岡 そう、全然ね(笑)。それで、あすは見よう、あすは見ようって。まるで、アスナロですよ。それで、つい半年過ぎちゃった。

立花 今、月にどれくらい原稿をお書きになるんですか。

長岡 枚数で数えるということはないですけど、要するに、毎日何か書いてなきゃならない。

立花 ああそうですか。

長岡 何のために生きているか分からなくなっている……。1年くらい仕事をやめて、どこかブラブラしたいですよ。

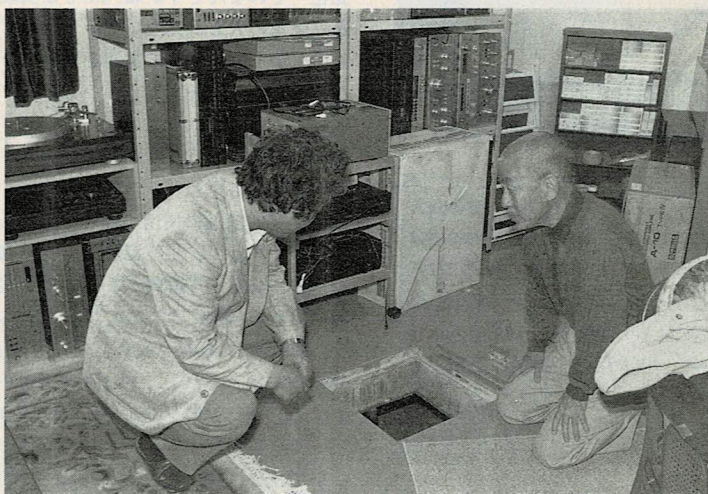
立花 それはいいですね。

長岡 さっきも言ったように老後の楽しみ、というのもあったんですが、かえって仕事が忙しくなっちゃった。だから趣味としては、AもVどちらもダメですね、楽しむ暇がないんだから。

やはり、装置がよければよいでまた悩ん



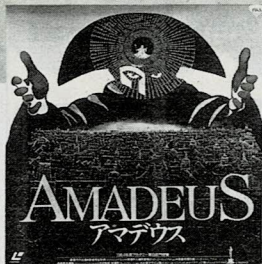
かつて立花さんが激賞したスワンのマークIIが完成
(製作記事は6月15日発売の別冊FManに掲載)



「床下はどうなってるんですか？」

アマデウス

(LDC SF098-5062)



アカデミー賞を独占した名画であり、筆者も試写会で見た。LDは映画そのものにはかなわないが、下手な映画館の下手な場所で見るとはいい。実をいうと最初21インチで見て、これはダメだと思ったソフトの一つである。それが120インチで見たら一変した。これは難しいソフトである。再生次第でベストにもワーストにもなる。もしワーストになったら装置を再検討した方がよい。映像は全体にソフトフォーカスで、引き締まったところはないが、情報量は意外に多く、解像度も高い。これを再生するのは難しい。色調はパステルカラーで、微妙だが美しい。SN比はかなり悪い。それでもこの映像は美しいし、音もいい。本当のマニア向けのソフトだ。

シーナ

(LDC SF078-5151)



男はターザン、女はシーナということで、1930年代から人気のあったコミック・ストリップのヒロインである。アフリカに来て落盤事故で両親を失った幼女が、原住民ザンブリ族の救世主として育てられ、無法のやからからの侵略から一族を救う。タニア・ロバーツ(チャールズ・エンジェルの一人)演ずるシーナは、超能力で動物を操る。ストーリーは予想通りに展開して悪は滅びるが、ケニア原地ロケの映像が素晴らしい。音声も同時録音が中心で、雰囲気抜群。ヘリコプターが頭上を飛ぶ時は音も頭上に定位する。アクション物らしからぬ画面の美しさが一種の違和感を生むほど。シビアに見ていくと、合成画面に気がつくが、これに気がつくかつかないかがポイント。

幻魔大戦

(LDC AH009-35KD)



アニメはそれほど多く見ているわけではないが、手持ちベスト1が「カムイの剣」であり、ベスト2が「幻魔大戦」である。製作と監督が同じで、金と時間をかけたいい画面作りは同じ、音はカムイが上回るが、それでも優秀。すべての面で群小アニメを一蹴する秀作。カムイに比べると、難解なストーリー、壮大すぎるスケール、あまりにも超人的な、そしてかわい気のないブスとブオトコの登場人物、といった点でなじめないものがあるが、細部まで手抜きのない画面、立体感、華麗な色彩、迫力のあるサウンド、サラウンド音場といった点では群小アニメに圧倒的な差をつける。ただし絶対に大画面大音量向きであり、小画面小音量では群小アニメに負ける。



立花隆氏「今のソフトの質ではあまり大きな画面は必要ないんじゃないかと思う」

でしまう、というのは、つらいものがあるかもしれない。それだけ、読者に届けられるリポートは充実したものにはなるのだろうけれど。おりから、画面には衛星放送による大相撲中継が流れはじめた。さすがに、大きな画面で見る力士は、迫力がある。何しろカットによっては実物よりも大きいのだから。

ハイ・クオリティ・システムを持つ悩み

立花 いま衛星放送はどうなんでしょうね、着実に、受信者は増えていると聞いていますか。

長岡 受信料はどうなりますかね。

立花 ちょっと普及しだすと、すぐその話が出てくる(笑)。あれがいけないんだ。NHKも、もうちょっと太っ腹に、2年間はただとか、宣言しちゃえば。先生は、衛星放送はよく見るんですか。

長岡 あまり見ないですね。それほど、面白いものはありませんし。

立花 僕は、毎日見えますよ。大体、仕事が午前3時くらいに終わるとスイッチを入れる、衛星放送は、そのころが1日の開始なわけ。まずパリからのニュースで始まる。

長岡 それはBSでしかないものね。

立花 それから、ロンドン、ニューヨークあたりの全世界中のニュースが流れてくる。

長岡 僕はそんな時間起きてないもん。でも、立花さんは、仕事柄、ああいう形

でニュースが流れるというのは。

立花 いや、もう、ありがたいですね。とにかくほんとに面白い。リアルタイムに情報が流れるから、あれを見てると、ほんとに、何か国際社会というものを実感しますね。

長岡 僕はそれが、おかしいと思いますね。BSではなく、なんでもっと教育テレビを使わないか。あれこそ、ステレオで24時間化すべきなんです。一部の人のしか見せないのは、けしからんと(笑)。

立花 それなんですがね、BSでは実験放送で少数の人しか見ないということで、ものすごく安い値段で番組を買っているんですよ。ニュースもオペラもロックもみんなそうです。

長岡 ああ、そうか。本放送だと高くなっちゃうんですね。

立花 普通放送に使用するとなったら、めちゃくちゃで、もう話にならない価格になる。先日の「指環」だってBSが実験放送だから放映できたんです。だから、今、ほんとにBSは「買い」なんです。見たい人は。それと、やはり音声がいいですね。特に、デジタルをいいD/Aコンバーターでおこすと、これはもうすごいいいですよ。例えば、ニューヨークからのニュースは、ロックフェラープラザのすぐ横にあるビルの20何階から送られてくるんですが、下の道路を走っている自動車の音とかが聞こえたりする。

いずれハイビジョンもBSを通してやられるでしょうね。あの、キメの細かさ

はすごいものがありますね。

長岡 そうでしょうね。やはり、ハイビジョンもプロジェクターでしょうね。僕はブラウン管で見たいとは思わない。

立花 いや、あれは、ブラウン管でも結構いいんですよ。

長岡 面画が小さいからなあ。

立花 すぐそばで見られますからね、目の前で。そうすると、不思議な感じですよ。目の前で、ものすごくキメが細かい像が動いてる。そうすると、大画面と別の意味で画面の中に引き込まれる感じがあるんですね。何ていうのか、ものすごく精巧な生き物がそこにいるという感じで見えたり……。あれは実に面白い。

長岡 そうね。オーディオでも、ほんとにそこに人がいる感じになりますからね。それが、非常に小さく出せる場合と大きく出せる場合がありますね。

でも、これからは、やはりAVですかね。ユーザーを訪問しても、システムに最近はずっとテレビが入っていますね。やはり画にひっぱられちゃうんだね、一度経験すると。

立花 いや、僕は、先ほど映像なしでレコードを聴かせてもらったときに、ああ、ビュア・オーディオっていうのも、いいもんだなと思いましたけどね。

長岡 いいですよ。音楽は、やはりビュア・オーディオですよ。室内楽やオーケストラは、映像がなくてもいい。オペラは別ですけど。オペラ以外は、僕は買いたくないね。音も悪いもの。それは、ピ



再生装置が変わるたびにケーブルを差しかえるやり方はオーディオと同じ

ユア・オーディオにはかなわないですよ。

立花 オーディオもそうだけど、ビデオも再生装置のクオリティが上がれば上がるほど、ソフトの質が気になってしょうがなくなりますね。

長岡 画面にしても、大きいから解像力が落ちるんじゃないくて、アラを出しちゃうんですよ。今までいろいろやった感じでは、解像力はサイズに比例する。本当の解像力はね。そう思いますね。だから、大きくしたいんですよ、120より150の方が解像力がいいはずだから。調整次第でいけるんですよ。

立花 ただ、今のソフトだと、僕はこれ以上大きくしない方がいいような気がしますね。どっちを取るかでしようけど。解像力を求めるか、迫力を求めるかね。これ以上大きくしちゃうと、伝えるものが、もっと少なくなってしまうと思うんです。

長岡 それはありますね。だんだん減ってきてっちゃうね。

立花僕はオーディオで、装置のクオリティを上げるほど、これは聴けないというソフトが増えてきた……。

長岡 そうなりますね。必ずしもクオリティを上げるだけがいいとはいえない。

立花 それで途中で気がついて、ソフトの質が悪いものは、別にもう一つ質が悪いシステムを置いておいて、そっちで聴けばいいのではないかと。ビデオもそうなんじゃないですか。

長岡 それは、ありますね、確かに。

「いい年して、馬鹿なことを……」 と冷たい家族の視線

立花 しかし、さきほどの今の若者の話ではないですが、若いときから、こういうものに触れちゃうと、勉強する暇がなくなっちゃうんじゃないかしら。

長岡 勉強はできないね。見ているだけですから。

立花 いますごい自閉症的な人間が増えている。赤ん坊の時にテレビ漬けになると自閉症の子供になりやすいというのは、やっぱりそういうことがあると思うね。

長岡 ウチじゃ、テレビを一生懸命見ているのは僕だけだからね（笑）。子供は、赤ん坊の時にさんざん見せたのでいや気がさしちゃって、大きくなってから見なくなっちゃった（笑）。

立花 じゃあ、親父の趣味は冷たい目で見られているんですね。

長岡 そう、馬鹿なことばかりやってる、いい年してってね（笑）。

立花 親父が熱中し過ぎるから冷めてるのかもしれないですね。でも、一応ここに来て、何か見てはいったんですか。

長岡 1回だけ（笑）。

立花 じゃ奥さんは。

長岡 忙しくて、こんなの見ていられないって……。

立花 もったいないですね。

長岡 それに僕が見ないテレビをつけ放しにするから、年中ブツブツ言ってますよ。いやテレビは昔から好きだったんだ。



長岡鉄男氏「本当の解像力は画面のサイズに比例すると思う。だから、もっと大きくしたい……」

いつも、朝起きたらつけて、夜寝る前に消す。大体が置いてあるテレビ、全部つけておきたいほうだね、見てはいないのに。パッとスイッチ入れて、見なくて、すぐ外へ行っちゃう（笑）。何か、だれもない部屋でテレビが鳴っているのが、好きなんです。

だれだったかな、作家か何かが、唯一のぜいたくは、部屋中に電氣をつけておくことだって。だれもない部屋に電氣がついていると楽しいんだって。まあ、そういうこともあるんじゃないかな。

立花 いや、僕もそうなんだけど、ウチのカミさんが消して歩くのが好きで、僕は片っ端からつけちゃ怒られて。片っ端から消して歩くんですよ（笑）。

長岡 女房というのは、消して歩くもんですよ。こちらは、つけて歩いてる（笑）。

立花 しかし、こういうことをやるには、やはり奥さんの理解というか。オーディオですと、単品を買い替えるというのは、亭主が勝手にやれる部分もありますけど、これだけのことは、やはりカミさんと相談しないと……。

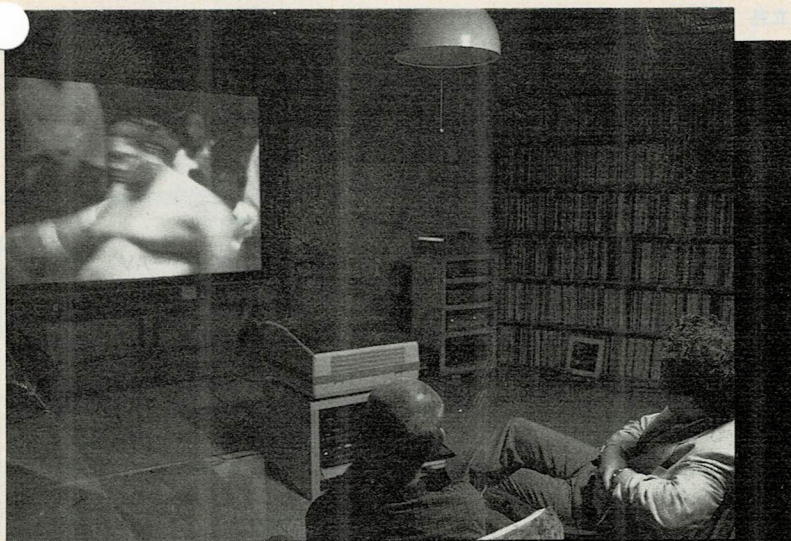
長岡 女房対策は時間をかけることですね。今日の明日じゃだめです。

立花 やっぱり、先生の奥さんも、裏の土地を買うのに……。

長岡 まず、土地を買うのに反対ですから。もちろん、建物を建てるのも反対ですよ。それは、当然といえば当然……。

立花 ウチだってそうですよ。

長岡 何か新しいことをやろうとすると、必ず反対するわけよ。やはり、どうも女性というのは保守的なんですよ。男は何か新しいことをやりたがるの。それから、



120インチで見る「小錦」は一種異様でさえある



4月には本誌などの読者40人を招待して長岡流AV術を披露した

中曽根方式というかね、いつの間にかそこへ持っていつちやうという……(笑)。少しずつごまかしていく。いきなりやろうたってできないですよ。少しずつやっていくと、もう仕方がないなと。これが一番いいわけです。時間かけないとダメね。いきなり「明日やるぞ」なんていうと、大変なことになる。まあ、オレンジや牛肉自由化もうまくいくんじゃないかな。時間かけて、徐々にやっていくから……。もっとも、これは立花さんが専門家ですから(笑)。

なるほど、それぞれに苦労はあるもので、これは初めて聞く話だ。女房操縦術まで伝授されてしまった。まあ、世の亭主族というもの、いづれも同じだな、と思われた方も多いに違いない。それにしても、これだけの規模のAVルームを完成させるのは、やはりご家族の協力も必要だっただろう。

さて、この「方舟」は、チューニングの期間を経て、今、本格的な活動に入った。ここから発信されるリポートがさらに鋭さを増し、これからのAVへの一つの方向性を与えてくれるものなのか。それは、ひとえに長岡先生のカジとりにかかっていることはいうまでもない。

「方舟」は製品の 本当の力を引き出す場所

立花 この広さ(48畳)ですから、当然最初からプロジェクター方式で考えられ

ていたわけですね。

長岡 ええ。それでなきゃ、こんな大きな部屋はいらないんですよ。12畳もあれば十分です。200インチを想定したわけですよ。200インチを何とか置ける広さ。それで、こんなに大きくなっちゃった。

立花 プロジェクターへのこだわりというのは。

長岡 プロジェクターというのはアナグロなんです。シャドウマスキがなく、3色を混合するわけですから。ブラウン管はデジタルなんです。3色が区切りをもって並んでいる。だからプロジェクターは、ある意味ではだらしがない。ざっと並べちゃっているから。でも、そうしたアナグロのよさというのはありますよね。

立花 スクリーンを大きくしたいというお話でしたが、いつごろ、これぞという完成形態になるんでしょうか。

長岡 ちょっと、まだ分からないですね。やはり、来年ですかね。いや、もっと先かな。一応、ハイビジョン時代を想定して目標にしていますから、ハイビジョンが出てこないとは分からないですよ。

立花 先生としては、やはり、オーディオはオーディオとして……。

長岡 そうそう。やっぱり、僕は音楽はオーディオだと思っんです。AVの音をとりだしてみてもね。ただ、目からの情報というのは、強いからね。一瞬、パッと見ても、そこから入ってくる情報が実に多い。音は一瞬では、何も入ってこない。こんなこと言っていると、オーディオマニアからは脅迫状が来るかもしれないけど。純粋な人が多いから。

立花 長岡鉄男が宗旨変えしたんじゃないかというようなとらえ方をするんですね、世の中というのは。

長岡 そうなんです。

立花 もともとオレの宗旨は違うんだと言ってもダメなんです。いくら、オレは30年前からテレビが好きだったんだと言っても。

長岡 要するに、けしからんということだから。でもね、「方舟」を作ったよかったです。製品の実力を十分に探って、引き出せる場所ができたということですね。プロジェクターにしたって、僕だって最初は不安がありましたよ。あの飛行機の中で映しているようなもののイメージがあるから、印象はよくなかった……。でも、これも仕事だからと、自分で納得して入れた。まあ、悪かったら、悪かったでなぜ悪いかを原稿にしてやろうと(笑)。結局最初から、驚くほどよかったんですが、調整していくうちにさらによくなってきた。メーカーの人たちが「この機種はこんなにキレイな画面が出せたのか」と、びっくりしているわけですよ。それは、必ずしもその人が不勉強というのではなく、メーカーの製品のテストの環境を考えると無理からぬところはある。すべて十分に追い込めるように、出来てないことが多い。だから、自社の製品、自分の作ったものに自信を持っていんですよ。スピーカーでもありましたものね。スタンドをしっかりしたものにして、きっちりとセッティングして音出しすると「このスピーカーがこんなにいい音がするはずがない」なんて(笑)。とにかく、そうした、一つ一つの可能性を、引き出してやるのが、評論家の役目だと思っています。

Information

長岡鉄男のスーパーAV

～ホームシアターをつくる

(定価1,800円 菊判上製・234頁)

6月29日発売予定)

本書は、著者が30数年の評論活動の中で得た貴重なオーディオ・ノウハウのすべてを注いで完成した、話題の超AV「大画面ホームシアター」建設の全記録。「これは異次元の世界……元の世界に戻れないのでは」(本文より)というAV未体験ゾーンへの招待でもある。写真・図版多数収録。

私は「ハイビジョン時代」到来を待つ

立花 隆

とにかくこれはうらやましいの一語につくる。これはもうAVルームなどというものではなくて、ミニ・シアターである。入場料を払っても喜んで見にくる人がいるだろう。

まねしようたって、こんなものはそうやすやすできるものではない。部屋の面積が80㎡もある。2DKのマンションなみの面積がまるまるAVルームになっているのだ。こんな贅^{ぜいたく}派はとびきりの大金持ちでなければもう都内ではできない。筆者が住んでいる小石川のあたりだと、80㎡のマンションは軽く1億5,000万円はする。それにマンションでは、天井が低い。ここは3メートル75センチもある。この天井の高さが、スクリーンの大きさにも、音響効果のよさにもきいてくる。

計算したら、この部屋の容積は300㎡ある。30万リットルだ。たいていの人のリスニングルーム、AVルームの容積は、この10分の1もないだろう。音というのは、最終的には部屋の空気全体を鳴らすものである。だから究極のオーディオ装置は部屋そのものであるといわれる。ウーファーの箱が大きいほどよい低音が出るように、部屋が大きいほど豊かな低音が鳴る。AVでは、やはり豊かな低音が出るかどうかが決め手となるから、音の点からいっても、部屋は大きいほどよい。

「方舟」においても、長岡さん自慢の自作スピーカー「ネッシー」が実に伸び伸びと鳴っている。16Hzまで再生しているというが、16Hzになると波長は20メートルを越える。これくらい大きな部屋でない、16Hz再生の威力が出てこないのである。

こういうものを体験してしまうと、自分の家に帰るのがいやになってくる。拙宅のテレビは29インチである。音にくらべると映像のクオリティは低い。もう少し大画面にしたいという気持ちはあるのだが、先立つものが無い。それに実をいうと、家のAVルームでは巨大なスピーカーが場所を占領していて、これ以上大きなモニターを置く余裕がない。これがスピーカーのマグネットの影響を受けないですむ限界の大きさなのである。

それに私はシャープな画面が好きなので、7Hぐらいの距離で見ると、5Hまで近付くともう画面のあらが気になっていやになってくる。29インチの場合、7Hだと約2.8メートルだから、部屋の大きさからいって、やはりこれくらいが限界になる。

しかし、7Hまで離れると、画面の視角は10°以下である。だからどうしても、視野のくく一部にある小さな画像ということになってしまい、臨場感、迫力は薄れてしまう。

それやこれやで、

結局私は、本格的なAV時代はハイビジョンにならないとやってこないとおきかめている。

ハイビジョンをご覧になったことがない方にはいくら説明しても分かってもらえないが、いまのテレビとハイビジョンの画像のクオリティの差は、SPレコードとCDの音質の差くらい開いている。小学生と大学生の学力の差といってもよい。

ハイビジョンを一度見てしまうと、現行のテレビでいかにクオリティ・アップをはかろうとまるで無意味という気がしてくる。だから、いま映像装置に大金を投じるよりは、ハイビジョンが出てくる日にぞなえて貯金しておこうというのが私の考えだ。

実はいまメーカーが大画面型のテレビやプロジェクターをじゃんじゃん作って売り出しているのも、ハイビジョンにぞなえてのことである。いまの製品は現行のテレビ用だが、その生産ラインはハイビジョンが始まれば、すぐそちらに転用が可能なのである。

ハイビジョンになれば、普通の家庭で40インチ、50インチが当たり前になる。高精細度だから、視距離は3Hあればよい。6畳間でも50インチが楽に見られる。画像の質は35ミリ映画なみになる。3Hまで近付くと、視角が30°は楽にとれる。映画館の最良の席の視角に近い。画面の迫力が圧倒的に増す。画素が5倍にふえるので、信じ難いほどのディテールが見えてくる。525本の走査線が1125本になるといったスペックの比較だけでは想像もできないような質のちがいが生まれてくる。

私はどう逆立ちしても、「方舟」のようなAVルームを作ることは不可能なので（たとえお金があってもスペースがない）、いまはひたすらハイビジョン時代の一刻も早い到来を祈るばかりである。ハイビジョン時代さえやってくれば、普通の人にも、「方舟」なみの迫力あるAVルームを作ることが可能である。

だけど、そのときには「方舟」にもハイビジョンが入り、「方舟」の迫力はもっともっとすさまじいものになるだろう。だから結局、「方舟」には追いつけない。そう考えたら、もう1回ガックリきた。



立花さんのAVライフの核となっているのがBS。特に昼夜を問わず流れるワールドニュースは仕事柄とても価値ある番組だ

Dynavector

スーパーステレオ、ますます快調！

ついに
結論に
達しました！

各地エクスポの大形パビリオンのシアターサウンドシステムとして活躍を始めました。ホール全体くまなく埋める豊かな臨場感、強烈な迫力、高度な音質がプロ用サウンドとして高く評価されています。収容人員1000名をこえるホール用システムとして、またホーム用として更にカーオーディオ用として、スーパーステレオは万端です。他のサラウンド方式とは全く異なる原理（特許出願中）で開発してから3年。遂に結論に達したので、スーパーステレオは現用2CHステレオをメインとして、一切手を加えることなく、前方2CH、後方2CHをアドオンし、合計6CHシステムとするもので、スペースの大小を問わず設置も極めてフレキシブルで簡単です。スーパーステレオの全容を本社試験室では是非お確かめ下さい。カーオーディオ店、カーオーディオ店での出張デモも可能です。お申し込み下さい。新設計理論（特許出願中）による新MCカートリッジシリーズも各店好評です。

- XX-1 新製品 高出力 2mV.....¥60,000
- 17D2 MK2 新設計 ダイアカンチレバー 0.15mV.....¥38,000
- 23RS MK2 新設計 ルビーカンチレバー 0.15mV.....¥33,000
- 10X4 MK2 新設計 高出力 2mV.....¥16,000
- 50X MK2 新製品 高出力 2mV.....¥9,900

●当社全製品試聴できます。お電話下さい。資料は本社あて切手同封でお申込み下さい。

ダイナベクター株式会社

〒101 東京都千代田区岩本町2-16-15
TEL 03-861-4341